

尾道商業会議所記念館<第19回企画展示解説>

(2012年8月10日~2012年11月25日)

テーマ 引き札の美
~麗しき広告アートの世界~

引き札とは、今日でいう広告チラシのことであり、チラシといってもその図案・意匠はすこぶる美術的で、額に入れて飾れば一幅の作品と呼べるものがある。

引き札は江戸時代から明治・大正時代にかけて、商家や問屋、製造元が、店や商品の宣伝、セール、開店や年賀等の挨拶で配布したもので、鶴亀、松竹梅、七福神などの縁起の良いものや美人画などの図案に、屋号・商店名や商品名、所在地、電話番号などが添えられるのが一般的で、年賀などの場合にはその年の暦(カレンダー)が添えられたりもした。

江戸時代の1683(天和3)年、呉服商の越後屋が「現金安売り掛け値なし」のチラシを配ったことが引き札の最初とされ、引き札の初期段階、江戸期のもは単色摺りの地味なものが多かったが、時代が下るにつれて浮世絵的な色鮮やかなものが主流となった。

印刷は木版刷りと石版摺りを主とし、近代以降は印刷技術の進展から大量印刷が可能となり、今日遺る引き札の大半は明治・大正時代に刷(摺)られたものになる。

引き札という呼称の語源については、「お客を引く」、「引き付ける」、或いは「配る」(配ることを引くといった)などの諸説が聞かれるが、はっきりしない。因みに「チラシ」の語源は、引き札をまき「散らす」(大阪)に生じるといわれる。

新聞広告が盛んになると、引き札は次第に陰を潜め、やがてはそれに取って変わられ、姿を消した。

今日では美術的・資料的価値をもって着目され、コレクターはもとより、美術館・博物館において収蔵・展示されるものにまでなっている。

商都尾道でも当然、多くの引き札が飛び交ったはずであるが、現存し確認されている点数は極めて少ない。そのため、希少性が高く、それら数少ない尾道関係の引き札を掘り起こし、一堂に集める初の試みは、大変意義深いものがある。

美しきこの一枚の語り部達は、商都尾道の往時を、静かに語りかけている…。

尾道市内に遺る尾道の引き札



よろずや
方屋

江戸期
備後尾道東濱北江入
大根屋喜三

尾道市教育委員会所蔵



和洋船具商

広島県尾道市土堂町
倉田新助商店

因島棕のりゅうあいランド
民俗資料館所蔵



和洋船具漁業用具商
メリケン帆製機

尾道市
田中長七

因島棕のりゅうあいランド
民俗資料館所蔵



萬金物錨製造所

御調郡土生村海岸通り
宮地兵三郎

因島棕のりゅうあいランド
民俗資料館所蔵



履物傘卸商

尾道市十四日本通
西原保兵衛

因島棕のりゅうあいランド
民俗資料館所蔵



住友銀行尾道支店

日露戦争中
(明治37年~38年)
尾道市久保町

個人所蔵



蘭草商

尾道市長江町 平田豊太郎

尾道学研究会所蔵



蘭草商

尾道市長江町 平田豊太郎

尾道学研究会所蔵

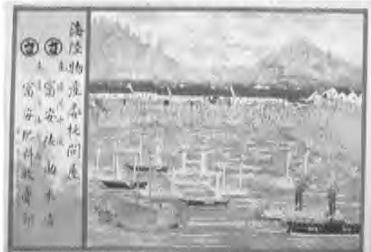
名誉市民山口玄洞ゆかりの引き札



山口商店

「山口玄洞」の会社
尾道学研究所蔵

北陸加賀に還る尾道の引き札 (石川県加賀市 北前船の里資料館所蔵)



海陸物産委託問屋

明治期 複製品

尾道港中濱 富安佐助本店
尾道港海岸通り 富安肥料販売部

北前船に乗って辿り着いた引き札であろうか。北前船(左下)に機帆船、蒸気船が港内にひしめき合っている。ここに描かれる港は尾道の住吉浜で、左端には海に向いて鎮座する住吉神社が見える。ズラリと並び立つ蔵に、積み上げられた荷物が当時の活気を伝える。



いかりせいぞうどころ 錨製造處

明治期 複製品

備後尾道鍛冶屋町
阪井善兵衛



よろずどんや 萬問屋

明治期 複製品

備後尾之道薬師堂町
野村喜兵衛



荷受問屋

明治26年 複製品

備後尾道港
宮地與兵衛

鞆の商家から出された引き札 (福山市 鞆の浦歴史民俗資料館所蔵)



牛乳屋

明治期

備後鞆町 鞆清乳舎



保命酒

明治34年

備後國鞆港 岡本元四郎



和洋船具一式商

明治40年

備後鞆港 森田商会



醤油卸小売

備後鞆町 岡本武次郎



萬太物商

備後鞆町 三村商店



呉服太物商

備後鞆関町 増田支店



小間物卸商 (雑貨店)

備後鞆港西町 田村直七